選定、③会則一部変更案などを協議しビールで乾盃、歓談しながら食事を共にして七時過ぎ散会。

文化協会フェスティバル

三月七日(日)昼八戸市公会堂、後援市教育委員会ほか。第二十三回の公演で各種和洋楽や舞踊等二十二番、琵琶部は最上穂洲氏が琵琶の伴奏による詩吟「末の松山」で好評。

大阪旭香会早春の調べ

三月七日(日)昼大阪東区本町津村別院北御堂津村ホール（会主菅旭香女史）、後援山崎旭萃会・協賛箏曲桜照会・舞道瑞穂流・尺八井上憲二ほか、司会NHK葛西聖司アナウンサー、（有料）。千代の寿ー会員、箏尺八入▼川中島ー雨宮光翠▼風林火山ー菅旭耀▼菅公ー古川道子▼箏曲（花咲く頃）▼伽羅の兜ー伊藤繁子▼淀君ー谷口旭芙▼箏曲（旅路）▼厳島の戦ー吉田旭晶・尺八入▼鴨川の露ー伊佐知旭勢▼源平無常の美（師弟四代）那須与市ー西田能子●青葉の笛ー菅旭香●舟弁慶ー渡島旭鶯●安宅ー山崎旭萃▼箏曲（波）▼琵琶舞踊黒田武士ー小橋肇、上田光樹、島田旭光・箏二、尺八二、立方一▼常陸丸ー西田陽一▼都落ちー角田旭優▼淀君ー安藤光鵬▼箏曲（光と風と）▼琵琶舞踊羽衣ー渡島旭鶯、菅旭香・絃旭波、旭晶・箏二、尺八二、立方一▼曲垣平九郎ー島田旭光▼土蜘蛛ー内藤旭波▼戦艦大和ー渡島旭鶯。

定期研究会と故辻清剛先生追悼座談会

三月十四日(日)昼東京新宿洲鳳会館、主催日本琵琶楽協会。吹雪の敵ー日比二水▼五條橋ー田島誼子▼鉢の木ー津和田岳聖▼大楠公ー若林旭洋▼講評ー吉川英史先生▼故辻清剛氏追悼座談会ー司会吉川先生。（有料）

錦心流琵琶八十の会演奏会

三月二十二日(月)夕五時半東京上野本牧亭、主催一水会本部企画部（有料）。八十歳以上の東京並びに近郊の一水会員の集りで老いて益々盛んなところを見せるのが目的で結成されたもの（活孤内は年齢）。月下の陣ー都築流和（82）▼城山ー小沢研水（82）▼安達が原ー青木玎水（84）▼川中島ー鳥海港水（85）▼彰義隊ー青木早水（81）▼新撰組ー横溝交水（81）▼茨木ー花俣圭水（84）▼敦盛ー宮原琿水（85）▼俊寛(下)ー荻野甲水（87）▼竜の口ー一水会長中谷襄水。

ラジオ琵琶放送

二月二十五日(木)午後三時十分NHK・FM義士の本懐ー中村旭園▼山吹の夢ー吉田旭幸。絃中村旭園、東旭秀・琴二階堂秋荘。

（予告）

○…**京都琵琶協会四月例会**　四月四日(日)午後二時本部平井会長宅。当日は会則一部変更、役員改選の臨時総会開催及び五月二十三日の演奏会出演順抽籤等のため会員は万障繰合せ出席されたし。

○…**筑前琵琶演奏大会**　四月十八日(日)正午本むさし会館七階（大阪梅田花月隣り、曽根崎警察署の裏）。主催筑前琵琶関西連合会。

○…**京都醍醐寺桜祭りに琵琶献奏会**　四月十八日(日)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

○…**日琵協関西支部総会**　四月二十九日(木)午後二時大阪市北区曽根崎二丁目一五ノ二四本むさし会館五階（梅田花月隣り）。

○…**大阪平野大念仏寺大法要に琵琶献奏会**　五月五日(木)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。正午東京港区赤坂公会堂、主催尾崎三郎氏。

○…**第三回青壮年琵琶演奏会**　五月十六日(日)

○…**各流派琵琶演奏会**　五月二十三日(日)正午京都東山仁王門バス停前本妙寺、主催京都琵琶協会。

○…**各流派琵琶名流演奏会**　六月五日(土)午前十時大阪東区本町四丁目北御堂津村別院ホール、主催日琵協関西支部（有料）

〒565　昭和五十七年四月一日発行（非売品）
発行所　京都市山田東二丁目三一番　絃社
編集者　村田植水
吹田市　電話〇六（八七五）〇三二六番　B六一四

あとがき

心浮きたちそめる●本号には期せずして水藤、島津御両氏が、琵琶のプロとアマの問題について執筆して下さった●これについて石橋旭嶺氏が疑問の一文を寄稿されたが、右両氏の御執筆によって氷解すると思い掲載を遠慮した●京都琵琶協会の錦心流男性会員某氏がたんのう症という難病のため昨秋入院して腹部切開の大手術をされた●七十九歳の高齢のため普通ならばこんな大手術はとても出来ないのであるが、永年琵琶で鍛えた肺活量が若い人に劣らぬほどの強靱さであったため手術は成功して二ケ月あまりで退院、目下自宅静養中であるが遠からず再び琵琶演奏も可能となられた●有難いことではないか、右某氏は全く琵琶のお蔭で命拾いをされたということを、敢えて本欄を通じて全琵琶人に披露したい。

琵琶機関紙　京絃　第三三四号　京絃社

平家の栄華と都落（三）

ばくすい

源三位頼政一家は宇治平等院で全滅した。結果から見れば呆気ない敗戦であり全滅であるが、その奮闘は自覚しいものであった。頼政は、高倉の宮以仁王を奈良へ落としまいらせるために、僅か五十騎をもって平家の大軍を支え、一同死を顧りみず勇戦奮闘して敵を恐れしめ、殊に頼政の次男兼綱の矢は、最も多く敵を倒した。平家は一応勝ったものゝ源氏の勇敢には今更のように驚いた。

奈良へ落ち行かれた以仁王は、興福寺の僧兵の出迎えに、間もなく手の届く所で、不幸にも流れ矢に当り亡くなられた。然しこのことは厳重に秘密にしたので、平家はこれを確認出来ず、この後長い間の悩みとなった。

保元・平治の乱以後、都に残っていた唯一の源氏は頼政だけで、その頼政一家は、治承四年五月二十六日、宇治に於いて全滅した。あとに残った者としては伊豆に流されている頼朝、木曽に隠れている義仲、平泉に隠遁中の義経、以上三人を主なる者として、外には範頼や頼朝の実弟数人が諸国に散在しているだけで、是等は何れも平治の乱に討ち漏らされた者や、危い命一つを助けられて辺鄙に隠れているだけであるが、源氏の強さが身に応えた平家は、若し叡山や三井寺、興福寺等の大衆がこれに呼応して奮起しては一大寺と考えた結果、都を福原（神戸）へ移すことにした。

福原には以前から清盛の別荘がある。清盛は以前安芸守に任ぜられ、厳島神社を修造して、その荘厳な社殿は目を驚かすもので、ここに行幸を仰いだこともあるし、宋国との貿易にも熱心であり、かたがた船着きの便利な福原が好きであった。若し源氏や僧兵問題が起これば、叡山や奈良から攻められやすい京都を避けて、福原に都を遷そうと考えたのである。

その時、右大臣は藤原兼実であったが、福原遷都について何等の相談にもあずかって居ない。清盛の専横で急に決定し、六月二日、安徳天皇、後白河法皇、高倉上皇は福原へ渡られ、天皇は頼盛邸、上皇は清盛別荘、法皇は教盛邸にそれぞれ入られたが、供の人々は宿所もなく大困りであったという。

平家の遷都で福原が都市計画に混雑している間に、諸国散在の源氏が旗上げの準備を始めた。その最有力者は義朝の三男頼朝で、兄義平や朝長より勝れていたので、父義朝は特に頼朝を愛し、八幡太郎義家以来、家督相続者ならでは譲り受け得ない掟の鎧「産衣（うぶぎぬ）」と太刀「鬚切（ひげきり）」を頼朝に与えた。平治の乱で十三歳の頼朝は、この鎧・太刀を帯び栗毛の馬に乗って出陣したが、戦敗れて東国へ落ち行く途中、父の一行に遅れて平家に捕えられ、清盛の継母池禅尼の口添えで幸いにも一命を助けられて伊豆へ流された。

流人として伊豆へ送られた頼朝は、韮山に近い蛭が小島で周囲の豪族が監視する中で毎日を送った。永暦元年の事で頼朝十四歳、それから二十年、窮屈に堪え悔辱を忍びつゝ力を養って来たが、治承四年四月二十七日源行家が以仁王の令旨を届けに来た。

頼朝は当時、北條時政の娘政子と結婚して北條に住んでいた。令旨を頂くや先づ時政と相談し、八月十七日山木兼隆を討ってこれを滅ぼし、二十日伊豆を発ち相模の土肥に出て二十三日石橋山に陣を敷いた。北條・土肥・岡崎・佐々木等、凡そ三百騎の勢である。

四絃漫筆

島津天嶺

(八) 純アマチュアリズム

本誌本年二月号の水藤先生の「真のプロはなく又真のアマもない。」との御説は、今の芸能的琵琶界に関する限り正論である。私も純アマチュアーで過ごすつもりであったが、変な雅号をつけたり、日本琵琶楽協会の「名流会」と称する演奏会に出演したり、何時の間にか「ノンプロ」の領域まで踏みこんでいる。せいぜい正絃会の演奏会位にとどめておけば「アマでござる」と開き直ることもできるが、他流派のプロの先生方に伍して、不特定多数の人々を対象として弾奏することは、たしかにアマではない。しかし出演料は、こちらが出しているから、まことにおかしな話である。

さて薩摩藩時代の薩摩琵琶（以下本項では単に薩摩琵琶と称す）が、その創始の動機から人としての修養や士としての士気の養成、又藩意識の昂揚を目的とした芸能であったことは御承知の通り、従って現在行われている演奏会形式のものは存在しなかったようである。いわんや琵琶で金品をもらうなどという感覚は絶無であったであろう。時代が下り、町人も琵琶を弄するようになった場合はどうであったか、私には何の知識もないが、その時代でも多分琵琶を聴く公開の場はなかったのではないかと思っている。

水藤先生のいわれるように明治になってからの琵琶史もくわしいものは、まだないようであるが、藩制下の琵琶については基礎資料さえないのではないか。後述の薩摩琵琶同好会の委嘱で、故越山正三氏 ―― この方は私が学生時代に同じ大学に居られ詩吟の会でお会いしたことのある因縁のある方であった ―― が鹿児島の琵琶史を書かれ、略原稿は出来上り印刷の段階になっているとのことであるから、或いはこの本の中で、これらのことについても触れておられるのではないかと期待している次第である。

話が横道にそれたが、明治維新によって東京に進出した薩摩琵琶は、時流に乗って「日本の芸能」となり、次第に聴衆の好みを取りいれてやわらかになり、遂に錦心流という新派が出現することとなるが、このような薩摩琵琶の変質をいさぎよしとせず、薩摩琵琶の本質を守り抜いた人々もあった。

そのうちのお一人に永井重輝先生がある。先生は伴流の名手、多くの門弟も育てられたが、御本職は大蔵省税関関係のエリート官僚であられたので、全く昔の武士と同じ気持で琵琶に対しておられたようで、公開の席上で弾かれたのは大正十二年の関東大震災の義損金募集の琵琶会 ―― 多分大阪で開かれたものと思う ―― だけだったと父が話していたし、又大正の初め頃に「武石浩玻」という題名のレコードを出されているが、これも作譜者永井重輝とでているだけで、弾奏者の名は出ていない。更に又先生の高弟の安田幸吉先生がラヂオ放送をするときは、その都度先生の許可を求められてきたとのこと、これは先生の御長男澄和氏の御話である。

このような「純アマチュアリズム」の伝統を今に守っているのが鹿児島の薩摩琵琶同好会の方々である。この会のことについて、会員でない私は正確にお伝えできないが、現在会員数は賛助会員を含めて百二十名、その中弾奏される方は三十名位か、月々の例会や春秋の公開弾奏会を折目正しく運営されている。鹿児島県の無形文化財保持団体に指定されているので、薩摩琵琶の本質と伝統を昔の姿そのままで伝承しておられるのには頭の下がる思いである。

別項でも述べたが、私はこの純アマチュアの方々の琵琶を求めて度々鹿児島を訪れているが、いつも感ずることは鹿児島の琵琶は、他の地方とは異質の何物かを持っているということである。それが何であるか、私にもよくわからないけれども、ひとつは「気魄」、初心の方々の歌にも何か力強さを感じる。そしてその第二は「聴衆に媚びぬ」ということであろうか。昔ながらの武骨な歌い方で十二分に個性を発揮して歌っておられるので、当世の芸能としてはその評価は高くないかも知れないが、その人にしかない「ひと節、ひと撥」を聴くことが出来る。

先年私は、この同好会の某先輩から「他流との交流もよいが薩摩琵琶から逸脱するな」と一本釘をさされている。今後も私は「ノンプロ」として行動することとなろうが、この御忠告は忘れぬつもりでいる。（末完）

おんなの都（八）

落合一誠

淀君（1）

淀君は、日本の女性史上最も著名な者の一人である。淀君という呼び名は後世のもので本名はちゃちゃ。淀城を与えられて以後〝淀殿〟或いは〝淀の女房〟〝二の丸殿〟〝西の丸殿〟などと呼ばれていた。

一般に淀君というと、絶世の美女で天下人秀吉の寵愛を一身に集め、秀吉の死後は権勢をふるって豊臣家滅亡を招いた、いわゆる傾国の美女と思われ勝ちであるが、淀君の正確な画像は一枚も世に伝わっていない。そして高野山持明院に残されている淀殿の画像と称するものは、いかにもいやらしい中年女の肖像画である。だから、この画像を見ているとおよそ傾国の美女などというイメージは湧いて来ない。

では淀君は不美人であったかというと、一概には伝い切れない。なぜなら、彼女の両親は共に美男美女であって、その娘が不美人というのはどうも合点がゆかぬ。

父の浅井長政は近江の国小谷の城主、母は織田信長の妹お市の方である。

長政の画像によると、でっぷり肥っていが仲々の偉丈夫で、鎧をつけたら嘶威風堂堂たる大将の貫録があったであろう。

また、お市の方は戦国時代を代表する美女中の美女、やや恥じらいを含んだ美貌は、日本人の好みそうな美貌に輝いていて、そのおだやかな容姿は一点の非のうちどころも無いほど、いかにも女らしく楚々たる女性美を具現している。

このような両親の間に生まれたちゃちゃが醜女であったとは思えないが、女児は男親に似ると云われるから、多分父親の血を引いていたのであろう。

そうすると豊艶な美女、グラマーであったのか。その点猿面冠者と称せられる貧相な太閤秀吉と比べると、対照的なほど豊艶な容姿であったことが想像される。

さて、尾張の織田信長は、中央を望んで勢力を張ろうとしていたが、これを阻む近隣の大名の内に浅井長政があった。浅井は、京極氏の番頭役を勤めていた家柄であるが、主家の内紛に乗じて力を貯わえ、小谷の城を築いて大名の仲間入りを果たし、戦前の朝倉氏と結んで信長の前進を阻んでいるため、信長は辞を低くして浅井に近寄らんとし、妹お市の方を長政に嫁入らせた。全くの政略結婚で、これによって長政を味方に引き入れんとしたのである。長政は信長の真意を疑いつゝ、夫婦の間にちゃちゃを頭に二男三女をもうけた。

その後信長は、天下を望んで行動を開始した。無論信長は妹婿の浅井が味方するものと計算していたが、浅井としては長年恩顧を豪った朝倉に弓をひくことが出来ず、さりとてお市の兄信長を袖にする訳にもいかず、兎つ追いつ思案の末遂に反織田の旗印を鮮明にする結果となった。

斯くして姉川の合戦が始まり、信長は浅井、朝倉の連合軍を散々に打破った。

この時ちゃちゃは七歳、戦国大名の姫に生まれて侍女たちにかしづかれ、蝶よ花よといつくしまれて育った彼女の運命は、ここに一変するに至った。それは小谷城が落城寸前のことであった。（以下次号）

山椒太夫

山本断水

安寿恋しや、ほうやれほ。
厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、
とうとう逃げよ、追わずとも。

正道はうっとりとなって、このことばに聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るようになって、獣めいた叫びが口から出ようとするのを、歯を喰いしばってこらえた。忽ち正道はしばられた縄が解けたように垣の内に駈け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつゝ、女の前にうつ伏した。右の手には守り本尊を捧げ持って、うつ伏した時に、それを額に押し当てていた。女は、雀でない大きいものが粟をあらしに来たのを知った。そしていつもの言葉を唱えやめて、見えぬ目でじっと前を見た。その時千した貝が水にほとびるように、両方の目にうるおいが出た。女は目があいた。「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合った。（森欧外「山椒太夫」から。）

山椒太夫の物語は歌舞伎でも演じられたし戦前の国語教科書にものっていた。若い人ならきっと欧外の作品を読んだことと思う。国鉄舞鶴線で由良川の鉄橋に差しかかると、車内アナウンスで、車窓から見える山の麓に由良の長者・山椒太夫の遺跡があることを知らせてくれるが、仲々旅情を誘われる。

山椒太夫の邸跡は、由良川浴いの国道一七八号線の直ぐ側にある。由良ケ嶽のすそが由良川で削られた急斜面なので、とても長者の邸があったとは信じられないような狭い所である。それもその筈、別に邸跡を示すような遺跡など発見されていない。ただ古くから土器などが出土したり、大きい石が地表に顔を出していて、〃踏まずの石〃と呼んで大昔に人が住んでいた、それが山椒太夫だ…ということになったらしい。

由良川を挟んで西が宮津市由良、東が舞鶴市八雲だが、山椒太夫にちなむ云い伝えは西の由良だけでなく、東の舞鶴側にもある。国鉄東雲駅から南へ二キロの所に安寿姫の塚が建っている。昔はこの辺りは舞鶴へ出る重要な峠道であったが、今は通る人もない閑静な農村で、道が山へかかるところに古びた宝匡印塔があり、安寿姫が太夫のもとから逃げたけれども、空腹のためこの辺りで死んだのを土地の人が葬って建てたのだという。

この物語は、平安朝末期に出来たもので、奥州の国主岩城判官の失脚によって妻と幼児姉弟の放浪と悲劇、厨子王の出世と報復。この三ツの筋が、守り本尊の地蔵様による奇縁で結び合わされているのであるが、悪玉の見本のような極悪非道の人物として出てくるのが由良の長者山椒太夫で、丹後の国主に出世した厨子王は人買いの禁令を出し、山椒太夫も奴隷を解放して給料を与えるようになったため、太夫一家も長く繁栄したと伝えられる。

五絃閑話

水藤五朗

プロとは……

芸の世界に於いて、プロとアマとは、どの様な相異を云うのであり、又、何と定義されるのだろうか？　大変難問である。一般的な表現では「玄人、つまりプロはそれでめしを喰ってゆくのであり、素人、アマチュアはそれを楽しみにするのである。」と云われる。がしかし、世の中はなかなか複雑で、プロであっても、その本業だけでは充分な収入が得られず、副業でめしを喰う場合もある。

今日、我々はその良い例を事業活動で見ることがある。毎日、家庭の食卓に上る調味料の一つ〃味の素〃はその典型例で、あの味の素の会社は、本命の「味の素」は総売上げの一割位で、残りの売上げは、コーヒーを始めとする、いわゆる関連食品の販売にするのだと云う。つまり、味の素の製造技法を活かした巾広い企業活動をくり拡げることによって本来の使命である「味の素」を守り育てゝいるのである。これと同様な例は数限りなく企業活動にはある。ここで注目されることは、これ等の活動の発想は従来の固定観念にとら

われないものであって、狭い意味でのプロ、アマの区別をすてている、と云うことである。

味の素は調味料の会社だから味の素だけを云う観念を捨てゝ、調味料の会社だから、人の味覚にかゝわる製品は全て作って、売ってゆこうと云う、極めて積極的、且つ、広い発想なのである。この為、本命である味の素自身の消費量は、いろいろな要因によって減少したり、頭打ちになったとしても、世間からは、アマチュア部門だと思われている他製品の収益が、それを守ってくれるのである。つまりアマチュア部門がプロの部門を守り、全体としてはプロの食品企業として活動しているのである。

芸の世界でも同様な例はある。例えば、先日急逝した江利チエミは歌手と云う肩書きが不動のものとなっているが、実際には、彼女のこゝ数年の活動の場は演劇であった。テレビで見るサザエさんを始めとする女優の活動が中心であり乍ら、江利チエミと云えば、やはり歌手として世間ではとらえてきた。彼女の歌声に衰えが見えてきたことを多くの人々は指摘し、それに比べれば、彼女の演技は立派に女優であったのだが、やはり江利チエミを我々は歌手と考えてきた。

こうしてみると、プロであるか否かを、単に経済上の面だけからとらえたり、一時的な活動からのみ定義する方法は、適当なものではないことになる。つまり、前述した二例の味の素と、江利チエミとは、企業と云う集合体の活動と、一個人の芸能活動と云う、次元の全く異るものであり乍ら、そこには一つの共通した姿勢、端的に云えば、本来の使命を基調にしながらも、それに固執することなく派生してゆき、結果としてはその使命を守り育てゝゆくことになるのだとの発想信念をそこに見るのである。これは決して転業ではない。味の素が味の素そのものを作らなくなったり、江利チエミが歌を口にしなくなったりするのであれば、話は別なのだが、むしろそれは逆で、味の素を守るため、チエミが歌手としての位置を保つため、新たな分野を開拓していったのである。勿論、そこには危険が伴うのであって、味の素の場合には経営の巧拙が問われ、チエミの場合も、個人活動の調整が問われた訳で、この意味で、彼女は心身管理に失敗したのであった。

プロとしての琵琶人は育たないと云う。いや、実際には育ててこなかったり、現在、育てようとしなかったりするのが本当なのだがその最大の理由は喰えない!!の一語からであり、その基本となっているのは、従来からの琵琶を弾ずる琵琶人の固定観念と、それを取り囲む閉鎖社会である。ある壮年琵琶人曰く「琵琶で食べられれば直ぐにでも会社をやめプロになる。」この言葉は現実性がある。しかし、実現性はない。これは「宝くじが当たれば買うのだけれど」と云うのに似ている。彼は一生買わないで終わり、当ることもない。この考えを捨てるのが今日の発想なのである。即ち、「自分は琵琶のプロである。それ故、芸とその姿勢に責任は持つ、が、経済性の弱さをカバーする為に他業を持っていて、それがたまたま会社勤めなのである…」との発想で、これが今日のプロである。

古くからある作品を厳粛に弾じてゆく琵琶活動のみでは喰えない現実があり、それに固執するあまり、プロを育てることを断念してしまうことは、味の素の売上げ不振を理由に製造を中止してしまう事に通じるのである。

結論を下せば、琵琶のプロとは、琵琶の活動を自己の意識の中で、無上の使命と考える人を指すのである。世間から見れば、琵琶で喰っていない場合でも、琵琶の弾奏に生命をかけているのであれば、それがプロなのである。そして、生命をかける琵琶人を育てる事がプロを育てることである。喰えぬ現実に心を奪われて、喰える理想へ一歩も踏み出さぬ姿勢に疑問を抱くことが大事である。

講談琵琶

剣客平手造酒の最期

辻旭城

〃月はまん丸まこもを照らす　大利根川の河面に、なぜか今宵は波さわぐ　あれは千鳥か　かいの音か　足掛け十年血で血を洗

う　利根の逆波男の意気地　されば天保水滸伝……。〃

浪曲界の重鎮玉川勝太郎得意の一節である。

下総の国は名所旧蹟が多いが、なかでも房総三山の一つに数えられている清澄山の山頂には清澄寺があり、かって日蓮上人が初めてお題目をとなえたところとして有名で、年中参詣者はあとが絶えないという。

南房総両国の一、二を争う親分飯岡の助五郎と、笹川繁蔵の宿命的な対決が、大利根の河原で天保十五年（一八四四）八月六日の払暁血闘が行われた。

蝉の鳴声が鎮守の森で逸早く夏を知らせ、青い空には雲一つない。だが利根の河原には血の雨が降る。講談琵琶や浪曲でお馴染の、〃天保水滸伝〃の開幕である。（本編起草にあたり、前述の天保十五年は十二月二日弘化元年に改元しているので年表になかった。）

繁蔵は三十五歳で、今の成田線笹川駅の附近に生家があり、先祖伝来の醤油と酢の製造を業とし、義侠に富む男であった。一方、笹川家に斬り込みをかけた助五郎は五十三歳で成田線の終点松岸で生まれ、狡猾にたけた男で正業は網元に貸元、それに十手持ちである。

未明、伝馬船で松岸から大利根を逆上ってくる。人数は三艘に分乗して八十人。

繁蔵の身内は勢力富五郎、清滝の佐吉を中心に二十二、三人が笹川河岸へ迎撃に向う。この隙に繁蔵の子分の一人が、笹川から一里ほど離れた神代村の尼寺、通称桜井寺の庵室で、労咳の養生をしている用心棒の平手造酒に知らせに走る。

痩身、青白い顔の造酒は、二尺三寸細造りの名刀堀川国広を腰に、せき込む苦しい息を必死にこらえながら、陰に籠る延命寺の鐘を合図に、ひさご酒で喉をうるおすと、一目散に笹川河岸に駆けつける。

〃義理にや強いが情けにや弱い　義理と人情は涙が先よ　されば天保十五年　抜けば玉散る長脇差　飯岡、笹川しのぎをけづる〃

平手造酒は江戸神田お玉が池に道場を構える千葉周作の最高門弟で、北辰一刀流の達人として門弟たちの羨望を集めていた。彼の剣風は、相手に対し迅速且つ軽妙で、並ぶ者無き手練の強者であった。造酒は千葉周作先生に大層可愛がられていたが、酒と女に身を持ち崩して破門され、流れ流れて遂に繁蔵の用心棒となった。身を寄せたのは天保七、八年というから、およそ八年もの間繁蔵の厄介になっていたのである。

造酒は今日の対決に、労咳で命旦夕に迫る身を引き替えにして、繁蔵に報恩を果たすべく白地の単衣に身を包み、利根川岸へ続く南口へと廻って来た。造酒の姿を見た新田の伊七が斬りかかり、造酒がこれを相手にしているその背後から常吉が抱きつき、更に石松が鳶口を打ちこむと、間髪を入れず伊七が造酒の左脇腹から八寸も斬り上げたので、流石の造酒も痛手に堪え兼ねてひるむところを、大勢で斬り殺した。

この対決で飯岡一家は八十人も居ったにも拘らず、僅か二十数人の笹川一家に破れ、死者三名、負傷者十数名を出し、笹川方の死者は平手造酒たゞ一人だけであった。

剣豪造酒の最期は殆んど惨めなもので、映画や講談などで伝えられるような華々しい最期ではなかったという。

琵吟石童丸

二月号に掲載の「琵吟石童丸」は左の通り改作しました。御批判下さい。（演奏時間約九分）。

（和歌）

ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば
　父かとぞ思う　母かとぞ思う」

（詩吟）

西を訪い東を訪ねて父を得ず
夕陽山に沈みて己に蒼然」

（琵琶）

十年に余る修業にて　生者必滅会者定離
本来空の理りを　悟りながらも恩愛の
情にはもろきものなるか」

（詩吟）

噫仏道是か恩愛非か
熱涙滂沱として法衣に落つ
忽ち聴く暮鐘無情の響き
杜鵑一声血に啼いて飛ぶ」

（琵琶）

あゝ父上に生き別れ、又母上に死に別れ
天にも地にも只一人　頼りとするは姉ばかり
逢うてこの由語らんと帰りてみれば姉も又
この世を去りて影もなし　さてもつれなき浮世かな」
心の奥の悲しみを　吹くは高野の秋の風」

一水会神戸支部・蓮水会新年宴会

一月三十一日(日)昼西宮市立夙川公民舘和室で開催。三浦会主の挨拶に続いて▼詩吟富士山ー一同▼黒田武士ー藤井康夫▼城山ー楊光子▼俊寛ー吉田秋水▼詩吟ー十六題▼城山ー村上湧水▼湖水乗切ー田中珠水▼井伊大老ー木の宮梅水▼重衡ー田村魁水▼盛綱先陣ー滝沢花水▼詩吟ー四題▼屋島の誉ー田実繚水▼平泉懐古ー川上琵水▼曲垣平九郎ー楊嶽水▼（以下来賓）涛陽江ー中野淀水▼日蓮誕生ー木庭旭山▼巌流島ー中山鳳水▼戦艦大和ー会主三浦蓮水。このあと新年祝宴を開き和気藹々、歓をつくして散会した。

錦心流琵琶新春演奏会

二月二十一日(日)昼大阪北区扇町市立北会舘、主催大阪（緻水会内）如月会、後援一水会大阪支部。如月会は広瀬緻水氏門下の若手の集りで事務所を中野淀水氏方に置く新進気鋭揃いで当日も盛会裡に終始した。金剛石ー一同合奏▼重衡ー島田▼石川啄木ー中野▼短歌朗詠ー相木▼雪晴れー近藤登水▼村上喜剣ー稲葉卓水▼湖水乗切ー杭東詠水▼掛合橋弁慶ー中野淀水、松原孔水▼新撰組ー森中志水▼（以下来賓）▼白虎隊ー住田紘水▼川中島ー吉本房水▼大徳寺ー島田旭紅▼曲垣平九郎ー楊嶽水▼姫百合の塔ー内田景水▼伊豆の御難ー木村蓮水▼小栗栖ー中山鳳水▼父乃木将軍ー小川吟水▼桶挟間ー広瀬顕水。

故松野紫雲氏一周忌法要

生前数々の名作詞を残された松野紫雲氏・（一水会神戸支部・蓮水会の両顧問、三浦蓮水女史の夫君）一周忌法要が二月二十一日営まれ蓮水女史を始め親戚や蓮水門下代表が揃って白水峡の墓地に参拝の後三浦邸に於いて浄願寺住職の読経、門人代表の追悼詩、蓮水女史の「菊水の旗」（故人作詞）を霊前で謹奏、続いて供養の宴に移って故人を偲んだ。

大阪道明寺天満宮菅公祭献奏琵琶会

二月二十一日(日)昼天満宮外殿、大阪琵琶同好会協賛。千本の梅林が名物で参拝者多く賑った。君ケ代ー一同▼赤垣源蔵ー筧▼城山ー安光▼菊水の旗ー米田▼川中島ー朽木▼爾霊山ー石田▼大楠公ー矢野旭信▼花の白虎隊ー松本旭勇▼小栗栖ー辻旭城▼竜の口ー小林旭湟▼合奏羽衣ー青柳旭水、別所旭女、鈴木旭令▼富士山ー野々村▼本能寺ー作花旭友▼新作赤城の子守唄ー石橋旭嶺▼菅公ー奥村旭美▼舟弁慶ー田中歓水▼岩壁の母ー天津八千代。外に剣舞、扇舞、日舞、奇術等数番

水藤五朗氏名古屋出演

名古屋市民会舘中ホールに於ける中部芸能タイムズ社主催の二月二十七日(土)新春邦楽清韻会、二十八日(日)東西顔見世第十八回名流舞踊会に錦琵琶宗家水藤五朗氏が各斯界第一流の邦楽邦舞家に伍して第一日は「耳なし芳一」第二日は「扇の的」を演奏して注目をひいた。両日共長唄、清元、地唄、常盤津、小唄、民謡、吟詠、詩舞等東西の名手花形が見事な至芸を展開して盛況を呈した。（有料）。

日本琵琶楽協会関西支部の役員会

二月二十八日(日)昼向日市の梅原理事宅に於て開催、山崎支部長、平井、三浦両副支部長を始め桝本旭風、富樫旭桂、梅原旭濤、矢吹旭美津、木下皇水、伊勢谷安江、楊光子、高千穂旭楓、植村寞水各役員（順不同）及び岡本旭村、高橋正雄、福島弥生、平井夫人が倍席。六月五日開催の支部主催名流演奏会出演者（薩摩系十四名、筑前系十七名、計三十一名）の出演順抽籤を厳正に行い、東京本部から応援出演の藤巻旭鴻、木原綾子両氏の演奏を聴衆の最も多い時間帯に組入れることなどを協議、続いて過日東京本部の総会に当支部から提案の諸件に対する結末を平井副支部長から詳細報告があり、終って乾盃、談笑裡に夕食を共にして七時散会した。尚当日役員会の決議により植村寞水（「京絃」主幹）は日本琵琶楽協会関西支部の顧問に推挙された。

京都琵琶協会三月例会

三月六日(土)午後二時本部平井会長宅。馬場、西川、楊、田中、矢吹、山岡、牧、桜井、岸本、水内、平井、植村の各会員出席、数氏研修演奏の後①会計監事を今後楊嶽水氏担当、②五月二十三日開催の演奏会に各自出演曲目